

された避難民孤児たちの顔が忘れられないからです。湿気の多い祖国の季節は、魂だけは強靱に育ててくれました。でも、冬に白い粉雪が舞うころになると、オンドルが、ペチカが、あの友が妙に恋しくなります。また、きな臭い匂いが漂ってきました。故郷が、だんだん遠くなります。平和であることを願うばかりです。

### 三十八度線が見えたか？

群馬県 北村 秋馬

終戦の詔勅が放送された日のことである。晴れ渡った西の空から、飛行機の爆音が聞こえてきた。三週間ほど前に聞いた爆音に似ている。やがて四発の爆撃機が、頭上に大きな巨体を現し、飛行雲を残して東へ消え去った。

当時の記録では、朝鮮で空襲があったのは二回しかない、という。その二回の空襲を身近で体験した。初めての空襲は、七月の下旬のことであった。中学校で授業中のとき、突然に空襲警報のサイレンが鳴り響いた。生徒も教員も、訓練と思っただけで慌てなかった。ところが廊下に出てみて驚いた。眼の前に、新聞などの写真で見覚えのある、アメリカの爆撃機が、校舎を目掛けて突入して来るではないか。操縦士のうすら笑いの顔が、脳裏に鮮明に焼きついた。あとで仲間と話し合ってみたが、

百メートル以下の超低空飛行であったことは間違いない。

この日の爆撃で、私の住む福溪の駅と、通学していた鉄原中学のある町の駅が、空襲の被害を受けた。落とされた爆弾はわずかであったが、福溪の駅では機銃掃射のために死者が出た。

機銃掃射の犠牲者は、駅の周辺だけではなかった。駅から離れた見通しのよい道路上でも、逃げ惑う朝鮮人の群れに、容赦なく打ち込まれた。白いチマチヨゴリを着用すれば安全だ、というデマを信じたばかりに、あらぬ犠牲を強いられた。

内地の空襲に比べ、被害が僅少であるにもかかわらず、住民は日本の敗戦が間近であることを、薄々と感じるようになった。

八月十五日は、夏休みの最終日であった。私は中学校の寄宿舎に戻るために駅へ行ってみると、駅のホームは北朝鮮から南下して来る兵隊であふれていた。いずれも完全装備の身支度で、表情に疲れがない。恐らくソ連軍と戦う前に、南下の命

令が出たのであろう。見送る国防婦人会の面々は、昨日に比べてわずかな人数である。列車が動きだしても歓呼の声はなく、見送りをせずに、改札口を通り抜けていった。駅の近くに先輩の母親がいた。「あなたたち、これからどうするの。日本は戦争に負けたのよ。学校どころじゃないでしょう……」という言葉にびっくりした。少しばかり言葉が荒かったが、私には大きな衝撃だった。それと同時に、正午ごろ東へ飛び去った爆撃機が、爆弾を落とさなかった理由を知ることができた。本当に日本は負けたのかと、半信半疑になってきた。

周囲を見渡すと、同じ鉄原中学の仲間たちが集まってきた。集まってきたのは、みんな日本人であった。朝鮮人の仲間はだれもいない。上級生の一人が言った。「とにかく学校へ行ってみよう。先生の指示で今後の行動を決めよう」と、衆議一決して、南下する兵隊が乗り込んでいる貨車に、私たちも乗り込んだ。

私の住む福溪の駅から、鉄原中学のある鉄原駅

までは、およそ二十五キロメートル、列車では約四十分の距離であるが、この日は寄宿舎で泊まることにした。寄宿舎の管理者は、五十歳を過ぎた元陸軍准尉で、厳しかった教練の講師でもあったが、挨拶にうかがった私たちに笑顔を振りまいて、「ちよとよよかつた。夕食には白米飯を、腹いっぱい食べさせてやるからな！」と言ってくれた。私たちが不審な表情を見せると、その理由を「陸軍がトラックで運んできたのだ。裏の倉庫に<sup>かます</sup>吠が、山と積んであるからな」と説明してくれた。

夕餉の食卓には、まばゆいばかりの井飯が並んでいた。何年ぶりであろうか、みんなは複雑な気持ちで箸を動かした。それから二時間ぐらい過ぎたであろうか、表の道路が騒々しくなってきたので、何事かと外に出て近づいてみると、朝鮮人のグループが小旗を振りながら、なにやら叫んでいる。朝鮮語の分かる者に聞いてみると、朝鮮の独立を祝い、万歳を叫んでいるとのことだ。小旗を確かめると、日の丸を巴の形に赤と青で区分けし

て、四隅にモース符号のようなものが書いてある。これが話に聞いていた太極旗なのだ。

独立を祝う旗行列は、十六日の午後、朝鮮の各地で一斉に行われたという。あまりにも統制された彼らの行動には、韓国併合から三十六年の間に培った執念を、改めて感じたことだった。

翌朝の始業式では、校長先生が興奮した口調で、終戦の詔勅を簡単に説明したあと、静かな重みのある声で無期休校を宣言した。周囲を見渡すと、同席していた数人の朝鮮人教員も、数十人いた朝鮮人生徒も、いつの間にか立ち去っていて姿がなかった。前代未聞の休校に、大きな衝撃を受けた我々日本人生徒は、話し合うこともなく、急ぎ足で自宅へ戻った。私たち福溪から通っている仲間も、駅へ向かった。駅から北上する列車に乗れば、普通ならば遅れても一時間以内には我が家に帰れるはずであるが、その日は思いどおりにはならなかった。時刻表にもない貨物列車が、日本軍将兵を満載して次々と南下していくのに比べ、北上す

る列車はあまりにも少なく、やっときた列車でも、徴用から解放された朝鮮人で鮪詰めの状態であった。

近づいてみると、それらの人々は大きな荷物を抱えている。明らかに軍需工場などから解放された工員たちであって、一部の者は、ホームで太極旗を振り回していた。このような周囲状況の中では、列車に乗り込むことは危険であると思った。日本人に対して、反感を持っていることは、確かなことだった。

私は列車に乗ることをあきらめて、歩くことにした。鉄原の駅から福溪の自宅まで、およそ二十五キロメートル、線路伝いに歩けば六時間ほどでたどり着くだろうと考えて、私は意を決して歩きだした。線路伝いに歩く私を、とがめる者はいなかったが、用心のために、人の集まる駅は遠回りに迂回して歩くこととした。帰心矢のごとで、気が高ぶっていたのか、少しも疲れなかった。予定どおり六時間ぐらい歩いたら、自宅の屋根が夕

闇に映えているのが見えてきた。

玄関に入った途端に気が緩んだのか、へたへたとして座り込んでしまった。家族の表情にも家の周囲の様子も、いつもと少しも変わりはないが、私がこれほど苦勞して戻ってきたのに、だれも慰めてくれないのが腹立たしかった。

十五日、十六日も、朝鮮人からの迫害を受けることもなく、また大きな騒動もなく平穩に過ぎた。しかしながら、終戦の詔勅は日本の公共組織を、根底から覆した。官公署、学校、郵便局などの閉鎖、列車の運行停止などで、日本人にも朝鮮人にも、それぞれの立場での不安は隠せなかった。十八日には、この福溪の町から約百キロメートルほど北の元山に、ソ連軍が上陸したという情報が伝わってきた。だが、その不安を打ち消すかのように、列車の運行が再開された。京城（ソウル）と福溪の間を、一日に数回ほど貨物列車が往復した。

我が家がある福溪は、京城から北へ約百二十キ

ロメートルの所で、鉄道が開通するまでは小さな田舎の村に過ぎなかったが、大正二（一九一三）年に京城と元山を結ぶ京元線が開通すると、福溪の駅に機関区が設置された。福溪から元山の手前の高山までは、トンネルと鉄橋の多い、勾配の急な線路である。そのために機関車を増結する必要があったので、福溪機関区の車庫にはいつも十数両の機関車が待機していた。こんなことで福溪の駅は、京元線の重要な拠点となり、鉄道の町として発展してきたのである。

また、鉄原は高麗の時代から政治、経済の中心地であった。そんな歴史的経緯から人口も多く、鋸屋根の大きな工場もあり、郡庁は当然のこと、裁判所、税務署、公立病院、中学校、女学校もあって、中枢都市であった。それに鉄原の駅は、朝鮮第一の観光名所である、金剛山へ行く電車の始発駅でもあった。電車の外形はスマートで、内部は小綺麗であった。私はその鉄原中学に列車通学で通い、終戦時には二年生となっていた。

さて、列車の運行が再開されてから一週間が過ぎたころに、福溪の町に住む自営業の日本人たちに、強制力のない内々の通知があった。それは「明日の午後、最後になる京城行き貨物列車が出るから、自力で持てるだけの荷物をまとめ、駅へ集合するように」という趣旨の内容であった。

あまりにも急な通知に、自営業の人々は慌ててしまった。彼らは渡鮮以来、それぞれに営々と築いた少なからずの財産がある。主に家屋、土地などの不動産ではあるが、これらの私有財産を、戦争に負けたからとはいえ放棄することはできない。だから自営業者のほとんどは、不安を抱えながらも居残ってしまった。

翌日のことである。官公署に勤めていた人々の官舎や、駅の周囲に立ち並んでいる鉄道員の官舎をのぞいてみると、室内にはめぼしい物品はほとんどなく、雑然としていた。畳の表側はすべて切り取られていた。略奪が昨夜のうちに行われたのだった。

ソ連軍が進駐してきた日のことは、半世紀以上が過ぎた今でも鮮明に記憶している。確か八月の二十七日の午後、数台のジープが土煙を上げながら驀進してきた。物陰から恐る恐るのぞくと、見たこともない帽子をかぶった兵士が、マンドリンと称される自動小銃を抱えている。兵士たちに周囲を警戒する素振りはなく、ジープは速度を緩めながら過ぎ去った。

ソ連兵の進駐によって、朝鮮人の表情と行動に大きな変化が現れた。昨日までは日本人に対して表面的には従順な態度であったが、無政府状態の今では、威圧的な口振りや動作に変わってしまった。南下する機会を逃した日本人たちは、それぞれの自宅へ引きこもり、身の整理に努めて、脱出の機会をうかがっていた。

八月の二十八日のことである。我が家にも一人のソ連兵が土足で侵入してきた。「ダバイ、ダバイ……」と何やら喚きながら、自分の手首を指している。彼らのあとについてきた朝鮮人の野次馬が、

腕時計であることを知らせてくれた。父と母はおびえながら、交互に時計を差し出した。ソ連兵は当然のごとくにもぎ取るようにして、無造作にポケットにねじ込んだ。さらに室内を見回し、銃口で押し入れを開け、収めていた布団をかきだして、庭へ放り出した。まだ十代と見られる赤ら顔の少年兵は、野次馬の先導者と思われる朝鮮人に促されて、出ていった。我が家はこの日の夜から、寝る所を母屋から近くの倉庫に変更した。同じような略奪を受けた父の友人たちが、周囲の人家の少ない我が家に避難してきたからである。倉庫はもともと養蚕のために建てられたもので、内部は広く板敷きとなっていた。この日から昼間も外出を控えるようにしていたが、それから二、三日はソ連兵の侵入も朝鮮人による騒動もなく、夜間も以前と同様に静寂が続き、不気味な日を過ごしていた。

この静寂が再び破られたのは、確か三日後の深夜のことだったと思う。母屋の方から窓ガラスの

壊れる物音がした。父と私は、月明かりを頼りに近づくと、数人の朝鮮人が棍棒を手に手に、手当たり次第に家具類を倒し、押し入れを開けながら、何やら叫んでいた。「おれたちは、昨日までは刑務所にいたんだ。悪いこともしないのに……」というようなことを言っていた。初めの言葉はよく聞こえなかったが、おしまいの言葉はよく聞こえた。気付かれないように倉庫に戻ったそのとき、薬局を経営している父の友人が、息を切らしながら入ってきた。「やられた！ 店も家も滅茶苦茶にやられた！ もう駄目だ」と、呆然として立ちつくしていたが、その目はうつろであった。彼は店のことが心配になり、その夜みんなが寝静まったころを見計らって、様子を見に行ったのである。恐らくほかの日本人の家も、同様な被害を受けていることは間違いない。

大人たちは外部の気配を気にしながら、今後の行動について意見を出し合っていた。敗戦という未曾有の体験に動転していたのか、意見は簡単に

はまとまらなかったが、春先から我が家の離れに身を寄せていた叔父（父の妹の夫）が結論を出した。「今すぐにでもここを脱出して、歩いて三十八度線を越えて京城へ行こう。三十八度線までおよそ四十キロメートルほどではないか。三日もあれば越えられるよ！」極道の裏社会を体験している叔父の言葉に、ほかの大人たちはいや応もなしにうなずいた。

夏とはいえ、北朝鮮の夜明けは寒い。既に身近に用意されていたリュックサックを背負い、朝霧に濡れた野草を踏みしめながら、野道を急いだ。幼い子供たちは眠い目をこすりながら、必死になつて無言のままついてくる。

何時間歩いたであろうか、見渡す限りの草原の中に、一軒の廃屋と、その庭らしき所に井戸が見えた。鍋を釣瓶つりびんの代わりにして、水を汲んだが、思っていた以上に冷たくて清らかであった。避難民として最初の昼食を囲んでいるとき、そばの野道を数人の初老の朝鮮人が通り抜けた。彼らの表

情には敵意は見られずに穏やかであったが、手に持っているものを見て、我が家のみんなは驚いてしまった。それは、父が弓道で使っていた矢が数本と、私たちが読んでいた少年雑誌である。今朝の明け方に脱出したあとに、空き家に等しくなった我が家の財産は、早々にすべて略奪されたに違いない。彼らの持っている数本の矢と雑誌が、それをすべて証明していた。

私たちグループ十七人は、黙々として歩くのみだった。十七人の内訳は、私の両親と子供たちの四人、父の妹の家族大人二人と幼い子供二人、それに薬局の家族大人四人、タバコ専売局の家族四人に、未婚の教員一人であった。

避難民としての最初の一日が暮れようとしていた。どのぐらい歩いたのであるうか、よくは分からないが、随分歩いたような気がしていた。山中の一軒家を見つけたので、休むことにした。恐る恐る事情を話してひと晩の宿を頼むと、主人らしい若い男は笑顔を浮かべてうなずいた。「お疲れ

でしょう。ごゆっくり休んでください。夕食の用意をしますから」と言ってくれたが、それは流暢な日本語であった。奥にいた奥さんにも、日本語で指図をしていた。「自分は一週間前に、京城の連隊から復員したばかりです。一年前に志願して入隊したのです。軍隊ではかわいがられました。おかげで、一選抜で上等兵に進級しました」と、その軍隊調で話す言葉には親日感があふれていた。

翌朝、親切な宿主の見送りを受けて、三十八度線を目指し、人通りの少ない山道を進んだ。昨夜の宿主の話では、鉄原からいくらかも進んでいないことが判明したが、この歩き具合では、あと少なくとも三日はかかるかもしれない。疲れをいやした一行の足並みは、少しばかり速くなっていた。ところが、一行の中に大きな障害があった。薬局の家族に、臨月の妊婦がいたのである。聞けば予定日は八月三十一日とのことで、いつ生まれてもおかしくはない。夫という人は出征していて音信不通、どうやら南方方面へ配属されたらしい、と

いうことだった。妊婦の母親がそばを離れずに世話を焼いているが、ほかの者にとっては、いら立ちの原因となっていた。

歩きの遅い彼女のために、予定している行動が大幅に遅れてしまい、二日も余分に歩いて、ようやく三十八度線の境界に近い部落に到着した。人通りの多い道は避けようとしたが、山道の周囲は平坦でなく、谷合いの部落である。意を決して広い道を進むと、すぐに三八式銃を肩にした、自警団員らしい者に呼び止められたが、簡単な荷物検査のあと釈放された。目指す三十八度線までは、あと一キロメートルほどである。一行の足取りは軽くなり、話し声も大きくなった。部落の外れにさしかかったとき、いきなり眼前に大男のソ連兵が現れ、見覚えのある自動小銃を抱えていた。一同は驚きのあまり声を失った。「ここから先へは行けない。……ここを通る日本人は、全員漣川へ送るようソ連軍の上司から命令されています。自分についてきてください」と言った。声は低いが

威圧感があったので、従うしかなかった。ソ連兵の後ろから出てきた自警団らしき若者は、三八式銃を構えながら一行を先導した。

漣川はこの地域では大きな町で、郡事務所や警察もある郡の中心地である。夕闇の中を一時間ぐらいいも歩いたのだろうか、一行は門構えの立派な大きな屋敷へ引き入れられ、追われるように押し込まれた部屋は、留置所だった。この屋敷が警察署であることも、すぐに気付いた。

留置所の広さは四畳半ぐらいで、隅に二尺四方の穴がある。のぞいてみると、臭気の漂う便所だったが、そこへ男たち七人が収容された。ゆっくりと横になることもできない。隣の部屋も同じ広さであろうが、子供がいるとはいえ、女十人では座ることも難しいだろうと思った。大人たちは何もすることがなく、一人がタバコに火をつけると、ほかの者もそれに従った。煙が狭い留置所から廊下へ流れていった。一服も吸わないうちに、自警団の者が飛んできた。「だれだ！ タバコを吸っ

た奴は！ 前へ出る！」と怒声と共に、手にした竹刀を格子の間から突き出した。運悪くタバコを手にしていたのは、父と薬局の渡辺であった。ほかの者は素早く便所へ捨てていた。「おれは三日前に刑務所から出てきたんだ！ 日本人には随分いじめられたんだ。独立運動の仲間、やつと自由になった。刑務所時代のお返しだ！」とばかりに、父と渡辺は竹刀で交互にたたかれた。だが幸いにも、格子の間隔が狭くて竹刀を強く振りあげることができなかった。

翌朝は、暗いうちに起こされて近くの駅へ連行されたが、駅のホームには避難民があふれていた。貨物列車に詰め込まれると、列車は出発して十分ほどで鉄原駅に到着し、避難民は降ろされて、指定された収容所へ分散して収容された。男性と女性とは別々に集められた。男性は本願寺の本堂、庫裏、倉庫などへ、いや応もなく押し込まれた。前日の留置所に比べれば清潔であったが、畳一枚に二人では窮屈で、寝返りもできないので、若い

者は庭に筵むしろを敷いて横になった。本願寺の周囲には、数人のソ連兵と、押収した日本陸軍の軍装に身を固めた保安隊員がいたが、警備はそれほど厳重ではなかった。私たちが食糧の買い出しに出ていっても、笑顔で黙認してくれた。

次の日の朝、近所に住んでいる人から驚くべき情報が流れてきた。一キロメートルほど先の町の、繁華街にある遊郭に強制収容された女性の中から、数人がソ連兵に凌辱されたことだった。妻や娘の安否を気遣う男性たちの表情には、いら立ちがつのついていた。保安隊に掛け合っても、らちが明かない。男性たちはなすすべもなく、あきらめざるを得なかった。

三日目の昼過ぎ、全員が庭に集められて駅へ向かった。駅のホームには、女性だけの集団が待機していた。やつのことで家族が再会できた。それぞれが抱き合って喜び、泣きくずれた。避難民を詰め込んだ貨物列車は、煙りを残して発車し、再び北上した。有蓋貨車の小さな窓から眺める外

の景色は、一年有余の汽車通学で見慣れてきたものだった。この貨車の行く先が元山であれば、見慣れた景色は見納めになるかもしれない。元山ならば、船で日本内地に引き揚げることになるだろう、などとみんなが話し合っているのを聞いていると、なんとなく腹が立った。

貨物列車は福溪の駅で長らく停車した。福溪から元山の手前の高山までは、電気機関車で山岳地帯を運行するのである。一年半前に、朝鮮で最初に電化された区間だった。

停車してからおおよそ五時間ほど過ぎても、貨物列車は発車する気配がない。そのとき、ホームの近くを見覚えのある若い駅員が通ったので、福溪に住んでいた日本人の消息を尋ねると、駅前の日本人が経営していた旅館に收容されていることを知らせてくれた。

我々のグループの一行は集まって、これからの行動について、それぞれの考えを話し合った。①ここで降りて、旅館に收容されている人たちと一

緒になるか、②それともこのまま北上して元山へ行くか、の二案に話がしぼられてきた。周囲に監視の者はだれもいなかったが、単独行動を妨げるような、威圧感が満ちていた。

夜が明けるころ、やっと貨物列車は動きだして、元山駅に到着した。狭い貨車の中で満足に眠れなかった避難民たちは、争ってホームに飛び下り、手足を伸ばしたが、無情にも列車はひと休みする暇もなく、発車の汽笛をあげて動きだした。

そこから先の窓外の景色は、すべて初めて見るものばかりであった。私が北へ旅行したのは高山までで、日本人が多く住む元山も知らなかった。しかし初めて眺める景色は、疲れをいやしてくれた。

いつの間にか、列車は威興駅のホームに着いた。ところが反対側のホームを見て驚いた。真新しい軍服を着用した、大勢の軍人が整列している。よく見ると武器もなく、将校は丸腰である。十メートルほどの間隔で、自動小銃を構えたソ連兵が監

視していた。我々避難民に敗戦国の悲哀を改めて教えてくれたのであった。避難民全員はこの咸興駅で降ろされて、市街地の中心部へ移動を命じられた。私たちグループに割り当てられた家は、咸興でも指折りの豪邸であった。その邸の主は近代的な精米所を経営し、商工会議所の役員で相当の財産家でもあったという。避難民は雨露をしのぐために、市内の日本人が住む家屋、神社、仏閣のすべてに、分散収容されたのであった。

久しぶりの畳は心地よかった。一人当たりの広さは、畳二枚分ぐらいであろうか？ 福溪の自宅を脱出してから十日以上にもなるが、その間まともな場所で寝たことはない。周りの者も横になると、すぐに鼾をかいていた。

雨露をしのぐ飯の住まいは確保されたが、次なる心配は食の問題で、三十八度線の突破については、当分の間考えないことにした。終戦後の混乱で、物価は異常なほど高騰し、主食の米が近くの闇市で一升二十円もしていた。終戦前の闇市が二

円であったから、わずか一カ月足らずの間で十倍に暴騰したことになる。手持ちの金では、約二カ月を食いつなぐのがやっとである。父は、働くことで所持金を減らさないことを決めた。仕事は、案に相違してすぐに見つかった。近くの診療所の境界に、板塀を立てる作業だった。

生来が器用な父にとっては、塀の造作作業は簡単なことであった。依頼主から借りた素人用の道具で、見事に完成させた。この仕事ぶりの噂を聞いたのか、仕事の依頼が増えてきた。私も兄も、父の手伝いで忙しくなった。日当は父が十円、私と兄は半人前ということで五円である。家族四人の一日の必要経費は三十円であったが、依頼主からのもらい物などで、なんとかかやり繰りすることができた。

一緒にここまで避難してきたグループの中に臨月の妊婦がいたが、幸いにも咸興に到着した日の夜に、無事女の子を出産した。産後は、妹が勤めている縫製所のお手伝いさんとして、赤ん坊と共

に生活することになった。渡辺の家族は、娘たちが一家を養っていたし、専売局に勤めていた上原の家族を養っていたのも娘であった。上原の娘は字の上手なことが認められて、日本人世話会の事務員となつて、世話会に住み込むこととなつたが、それはソ連兵の凌辱から免れる手段でもあつた。世話会への就職が、その後の上原一家の運命を大きく変えることとなつた。父の妹の家族は、子供連れである。この叔母の夫は、終戦前も働いていなかった。父を頼つて、我が家へ居候のようにしてやつてきたのは半年前で、それまで住んでいた満州での生活状況は、父もあまり知らなかつた。咸興でも働く気はないらしく、どこからか濁酒を仕入れてきて、毎晩一人で晩酌を楽しんでいた。叔母の口振りでは、相当の現金を持っているらしい。

十月に入ると、咸興の朝夕は次第に冷え込んできたが、道庁の所在地でもある咸興には、避難民が続々と集つてきてあふれていた。着の身着のま

まの彼らには、この厳しい冬を過ごせるあてはなかつた。寒さが近づくと共に、伝染病が発生し始めた。死亡率の高い発疹チフスが蔓延して、体力のない老人、赤ん坊は続々と死んでしまった。遺体を<sup>なま</sup>に包んで、墓地に運ぶ光景が目につくようになったが、ソ連軍も道庁の役人も感染を恐れていたのか、近づこうとしなかつた。噂によると、避難民の1割は死亡したということだったが、幸いにも私たちのグループの中には、発病した者はいなかつた。だが、これから先も健康であるという保証はない。冬が来る前に、元山へ脱出することも考えたが、決断することもなく時はいたずらに過ぎていった。

当時の記録によると、咸興に居住していた避難民は三万人を超えていて、劣悪な生活環境の収容所で、発疹チフス、再帰熱などの伝染病が発生するのは、当然の結果であつた。死亡者は冬の到来と共に増加し、十月の末ごろには、約三千人に達していた。日本人委員会では、多数の死亡者が続

出することを予測し、以前の陸軍兵舎の裏山に、長い塹壕を掘った。私を含めて、作業に携わった避難民たちは、まさか自分たちの墓穴とは知る由もなく、命ぜられるままに一生懸命に掘っていた。

ソ連軍と朝鮮人民委員会では、これ以上の伝染病の蔓延を防ぐために、咸興以外の土地に避難民を疎開させることを考えた。十月中に約四千人を興南へ、十一月末までに五老へ約千人、十二月二日には約四千人を富坪へ移動させることを決定した。いずれも咸興からは、三十キロメートル未満の土地である。

咸興に残る者と疎開する者の選別は、くじ引きで決められた。富坪行きとなった私たちグループは、指定された十二月二日の午後、咸興駅前に集合した。厳寒の季節を乗り切るために、持てるだけの毛布や布団を背負っていた。子供たちは有り合わせの衣服で、着膨れの格好となり、うつろな表情で親のあとをついていくのが痛ましかった。三千余りの避難民は、追われるようにして、無蓋

貨車にすし詰めにされた。

寒風が吹きすさぶ中を、四十分ほどで富坪の駅に到着した。ところが、列車が完全に停車しないうちに、元気な者たちが警備員の制止を無視して飛び下り、駅から一キロメートルほど離れた収容所へ駆けていったのである。彼らの行動目的は、収容所の概況を既に知っていて、家族のために最も良い場所を確保することにあつた。

わずか一キロメートルほどの道のりであつたが、避難民たちにとっては、希望のない苦しい旅だつた。収容所は、終戦時まで陸軍が駐屯していた兵舎であつた。周囲には、大砲の実弾射撃ができるような、広大な演習地が広がっていた。兵舎に入ってみると、窓枠がないことに気付いた。すべて現地人によつて、持ち去られていたのだつた。寒風が容赦なく吹き込んでくる中で、これから先のことを考えると、暗澹たる気持ちになつた。

富坪の収容所が、いかに想像を絶する悲惨なものであつたか、その状況を視察した朝鮮人民委員

会の調査団が、次のような報告記録を残している。以下は、この調査団の一員である検察部情報課長、李相北氏がまとめた報告書の一部である。

『咸鏡南道人民委員会の指示により、昨年十二月二日、咸興に在住する避難民三千二百八十二人を強制的に富坪へ移動せしめ、演習地の兵舎九棟に収容せしめたり。翌年の一月十日までに米三十六石と、雑穀二十四石を支給したるのみにて、副食物も一着の衣服も寝具なども支給なし。寝具の代わりに吠を二千枚と、兵舎内の保温のためにストーブを九個供給するが、それも代用品としてのドラム缶を与えたのみなり。また医療設備も薬品もなく、医師も二人いたが病に伏して間もなく死亡せり。兵舎の窓を吠で覆ったために、白昼でも凄惨な妖気に満ちた暗黒の病窟なり。それは避難民を救護する施設ではなく、呪いを受くる民族のまとめられた死滅の地獄図にして、老若男女を問わず蒼白な表情、幽霊のように蠢く彼らに肉はなく皮と骨のみなり。足は動かず立つときは全身

を支えることも適わず、子供たちは伏して泣き、無数の病人は呻きながら吠の中に仰臥しており、暗黒の中を咳に咽びつつ、極度に衰弱した幼児を背負って食事の用意をする。まさに地獄の縮図以外の何ものにもあらず。

避難民のほとんどは気力も希望も持ち得ず、既に死を待ち望んでいる表情が窺えり。吠で巻いた幼子と思われる遺体から髪と足先が露出し、母親は力なく背負いよるめきながら死体置き場に歩いていく。無造作に置かれていく死体の上に、愛し子を下ろして力ない目で眺めている。それは絶望と飢餓と永劫の憂苦に喘ぐ人間の苦悩の表情であった。……』報告書はまだ続くが以下略する。

富坪における死者の数は、十二月だけで三百人を超えた。私も風邪をこじらせて、意識不明のまま、寝込んでしまったが、意識が戻るのに二週間が過ぎた。周囲を見渡すと、元氣な避難民はごくわずかだ、大部分の者は、うつろな目で横たわっている。

グループでも間もなく、元気だった父が病に伏した。福溪で在住以来、苦楽を共にしてきた薬局の渡辺が死亡したのは、一週間ほど前だった。親友の死を目前にして、父はひどく落胆していた。

母の懸命な看護も空しく、喉に詰まった痰を吐き出す余力もなく、息を引き取った。

死に水で唇を濡らしたあと、母は無表情で手際よく、死後の処置にとりかかる。処置が終わったころ、死体運搬人がやってきた。用意した吠二枚で上手に遺体を包み、荒縄を巻いて外へ担ぎ出し、トタンで作った櫓そりに乗せて、死体置き場へ運んでいった。あとからついていくと、四十体ほどの遺体が無造作に積み上げられていた。遺体は、日没前に近くの墓地へ運ばれ埋葬されるというので、その日は戻ったが、数日後墓地へ行ってみて驚いた。父が埋葬された墓穴は、陸軍が掘っていた塹壕であった。幅と深さが二メートルほどに広げられ、長さは三十メートル以上あった。上から恐る恐るのぞくと、吠で覆われた遺体が無造作に積み

重ねられていた。その数は少なくとも三百を超えているだろうが、死亡者が増えることを予想してか、遺体の上にはわずかに土が撒いてあるだけだった。

厳寒の中での二カ月が過ぎた。私たちのグループも、福溪を脱出したときは十七人であったが、今は母と二人しかない。十五畳の広さが、余計に寒々と感じさせる。一月の初めに渡辺が、続いて父が倒れ、間もなく渡辺の妻もあとを追い、同行していた教員の南部も、狂乱の状態で亡くなった。渡辺の娘と孫は咸興に残り、上原の家族も咸興に残ることができ、結果的には運が良かったとしか言いようがない。叔母の家族と私の兄は、十二月の半ばに収容所を脱走して、南下した。収容所に残るも地獄、脱走するのも地獄であったが、運を天に任せるしかないと判断したのかもしれない。

父が亡くなって十日ほど過ぎた夜のこと、それまで涙を見せなかった母が、ぼろぼろの布団の中

で嗚咽していた。周囲の静けさが、悲しみを呼び戻したのであろうか。座り直して涙を拭いた母は、過ぎ去った父の思い出を語り始めた。

父が朝鮮に渡ったのは、明治が大正に変わったときだった。朝鮮総督府に勤めてから五年後、福溪の原野に魅了されて、農場の経営を思い立ち、総督府を退職して原野の開拓に働いたという。母とそのころに結婚し、爾来二十有余年、その成果は百町歩の田畑と、五百町歩の山林を有する大農場となった。昭和十五年の春に、祖母を内地から呼び寄せ、所有する田畑をくまなく案内した。そのころが、父の人生にとって頂点であったのだろう。父は避難民となっても、土地の登記簿と地図を大事に所持していたが、この収容所で過ごすうちに、あきらめてしまった。敗戦ということが、どんな結果になるかを、いやというほど感じたのかもしれない。母は急に声を潜めてささやいた。「それがね。大事に持っていた書類が役に立ったのよ。便所の落し紙に使ったんだよ。あれは美

濃紙だからね」と言う母の笑い声には、空しさがあった。

収容所に残留した二千九百余人のうち、わずかに二カ月で、三〇%を超える千人近い人々が、悲惨な環境に耐えることができずに死亡した。このことがソ連軍と朝鮮人民委員会による救援を急がせ、主食の増配、野菜、魚などの副食物の配給、そして多くの古着が送られてきて、医療設備もわずかながら改善された。夜になると、真っ暗闇であった収容所の中も、字も読めない十ワットの電球がともされて、避難民にはかすかな希望の灯となった。

二月になると、待望の浴場が開かれ、十二月初め以来の積もりに積もった垢を、少しずつ洗い流すことができた。入浴は虱の撲滅に驚くほど効果があり、それが死亡者の減少に貢献したのは、確かである。死亡者は、一月に比べて半数の二百五十余人となり、収容所内の環境も徐々にではある

が、良くなってきた。

小春日和の日差しがやわらかな五月の五日に、父が埋葬された墓地の近くで、慰霊祭が執行された。墓地が見渡される丘の上に、三メートルに及ぶ松の大木を削り、表に「嗚呼戦災日本人の墓」と大書され、裏には『この地に死亡した日本人千四百三十一人の冥福を祈り残留日本人これをつ』と刻まれた墓標が建てられた。終戦時の会寧郡守で、そのころは富坪第六分会長でもあった川和田秋彦氏が、生存者を代表して追悼文を読みあげ、終わりに自作の短歌をいくつか披露した。

「生き残る 千五百の我ら泣き濡れて 千五百の同胞の慰霊祭をする」

「今朝はまた 親子三人死んでいた 一家全滅 これで七つだ」

「息絶えた 同胞の衣服を剥ぎとりて すぐに羽織って寒さを防ぐ」

「なりふりで 男か女か分からない 死体が土間に転がっている」

追悼文を読み終えないうちから、すすり泣きの声が漏れ、すぐに参列者全員の嗚咽となって丘を覆った。慰霊祭が済んでも帰る者もなく、それぞれ肉親が埋葬されている墓地に跪ずき、語りかけながら手を合わせていた。

午後からは広い倉庫で演芸会が開催されて、歌謡曲、民謡、日本舞踊など、出演者は素人とは思えないほど上手だった。舞台衣装も、艶やかな着物をまとっていたので、所有者の執念を改めて思い知った。フィナーレは、五十余人の孤児たちが斉唱する童謡であった。ござっぱりとした服装にもかかわらず、全員が丸坊主だったのには違和感を覚えたが、集まった者は最後まで席を動かさずに涙をぬぐっていた。

春の到来と共に吉報がもたらされた。待ちに待った南下列車が編成されたのである。初めは孤児と病人とその家族が指名されたが、幸いといおうか母も病人であったので、私たちは一番の列車に乗り込むことができた。

列車は若葉が薫る田園地帯を、ひたすら南下した。途中で、機関車への給水のために元山に停車したので、ホームに降りてほかの列車に乗っている避難民を見て驚いた。避難民には見えない、高価な衣服を身につけていて、食べているものは重箱に入っている海苔巻きとか、稻荷寿司ではないか？ これではまるで物見遊山と変わりなく、明日から体験するであろう山越えを全然意識していないのではないか、と思った。あとで分かったことだが、彼らは私たちのように各地から逃避してきた避難民ではなく、終戦前から成興に居住していた人たちであった。

収容所を出てから二日目の朝、生まれ育った福溪の駅に着き、一時下車した。避難民はそれぞれグループを作って、幹線道路と人里を避けて、山中の小道を進んだ。母と私は、近くに住んでいるはずの知り合いの家を訪ねた。この家の主人は、父の農場の支配人であった。彼は、政治犯が主流を占める朝鮮人人民委員会にいらまれて、避難す

る際に父が管理を頼んだ農場はもとより、父から買った箆笥までも没収されたという。共産主義の嵐が吹きまくっていたのだ。支配人の話によると、私たち家族が住んでいた家には、隣の借家に住んでいた者が移り住んでいるという。その者は、思想的にも社会主義者であり、それが人民委員会の委員に選ばれたのであろう。

支配人から餞別の米をもらい、再び福溪の駅に戻った。ホームに顔見知りの駅員がいたので、鉄原へ向かう列車に強引に乗せてもらったが、その列車には避難民は乗ることが厳禁とされていた。車内は以前の三等座席ではあるが、板張りとなっている。ふかふかとしたビロードのクッションは、跡形もない。終戦のどさくさに持ち去られたのだろう。見回すと、向こうに日本人と分かる一団がいた。一目で、悲惨な収容所生活の体験がない人たちであることが分かる。彼らは、賄賂でこの列車に乗り込んだことは確かだ。

鉄原駅に降りると、そこには日本人のグループ

が目立った。大部分の人たちは、朝鮮人より身なりが良い。そのグループは駅の改札を出ると、人家の少ない山中へ向かったが、母と私は線路伝いに、次の駅へ向かうことにした。鉄原は一年以上も中学へ通ったことから、幹線道路も裏道もよく精通していた。母が病弱なのを考慮して、最短距離の線路伝いを選んだ。起伏の激しい山中で行き倒れになるより、平坦な線路を歩く方が母のためになる、と考えたからだ。

三十八度線までは三十キロメートル余り、普通の人なら一日で歩ける距離だが、母の歩みはいら立たしいほど進まなかった。日が暮れたところで、目についた一軒家に宿を請うた。親切な女の主人は、炊きたての御飯を勧めてくれながら「宿賃は知らない。その代わり着物があれば頂きたい。それに鉛筆があれば欲しい」と、たどたどしい片言の日本語で言ってくれた。リュックサックの中に着物はない。長い避難生活で食糧と交換してしまった。母が、リュックサックの底から着物の端切

れを取りだすと、その女主人は目を輝かせた。子供の私でも分かるほどの高価な織物である。短い鉛筆を添えて差しだすと、女主人は大袈裟な動作をして喜んだ。

久しぶりの十分な食事と睡眠のおかげで、翌日は母の足取りが嘘のように軽かった。予測したとおり、夕暮れ間近に、ソ連軍が管理する最南端の全谷駅にたどり着いた。線路は一直線に南へ延びていて、五百メートルほど先に鉄橋があった。川幅は優に三百メートルはあるだろう。鉄橋の間には、枕木が積み重ねてあるのが確認された。「見えたよ！ 見えたよ！ あれが三十八度線だね。よかったね」と、感無量の喜びにあふれた母の声が、周囲に響いた。しばらく佇んだあと、鉄橋に向かって小走りに進むと、鉄橋の手前で警備の朝鮮人保安隊員に、誰何すいかされた。よく見ると、警備隊の詰所があって、数人のソ連兵がいる。その周囲には数十人の朝鮮人が、座り込んでいた。詰所で簡単な所持品の検査を受けたあと、ソ連兵が陽

気な声で叫んだのを今でも忘れない。「ヤポンスキー、トウキョウ、ハラシヨウ……」

母と私は、恐る恐る鉄橋を渡り始めた。聞けば、朝鮮人は賄賂を渡して通過するという。ソ連軍の政策は、人道上の見地から日本人の南下を公認し、その反対に朝鮮人の脱出を厳しく阻止するようになった。

鉄橋の中間と思しき所に枕木が三本、線路に対して直角に積み重ねられていた。これが真の三十八度線だった。この境界のために幾多の避難民が、無念の思いを残して北朝鮮の土となった。私は枕木をまたいでから、何度もあとを振り返った。下を窺うと、雪解け水に五月雨を加えた激流が轟いている。月の明かりを頼って慎重に渡った。

引揚者の体験談によると、ほとんどの者が険しい山中の間道をさまよい、死にもの狂いで境界を突破したという。私たちのように、監視兵の公認のもとでさらに最短距離の鉄橋を渡った避難民は、極めて少ないのではないだろうか。

南朝鮮の境界に近い東豆川駅からは、列車に乗って京城まで向かったが、車内の雰囲気は終戦前と少しも変わらなず、安堵した避難民の姿が数多く見られた。京城では、世話会の指示で大きな寺に收容され、広い本堂の畳の上で疲れ切った体をいやすことができた。京城の繁華街は、戦前と少しも変わっていなかった。市場には、戦時中に姿を消していた甘味品が目立って、見覚えのある森永や明治のキャラメル、チョコレートが無造作に積みまわっていた。

三日後、仁川港から出航する五千トン以上もある貨物船の引揚船に乗船した。避難民は船内下層部の船倉に押し込められた。一人当たりの寝起きする広さは、一畳にも満たない狭さであったが、それでも人々は不満を言わなかった。あと二日で故郷へ帰れるのだ。船は穏やかな玄界灘を乗り切って、佐世保港に入港した。「国破れて山河あり」と言われるとおり、夢に見た懐かしの故郷は眼前にあった。人々は甲板に上がって、涙を流しながら

ら岸壁へ手を振った。岸壁では割烹着姿の婦人たちが並んでいて、応えてくれた。

入港してから一週間で過ぎたが、上陸前の検査が済まないのだ。人々のいら立ちが激しくなり、船員に八つ当たりする者もいる。故郷の山河を眼前に眺めながら、力尽きる者も少なくなかった。死者は毛布で丁重に包まれて、海中に落とされた。人々は、初めて経験する水葬の儀式にやるせない憤懣を抱いたが、どうすることもできない。

母も長い船中の生活で脚気になった。太ももの肉を押しても、元に戻らないのだ。キャベツの切れ端をもらって食べたなら、嘘のように快復した。この船の仮設トイレは、甲板の上にある。囲いも目隠しもない場所に応急の樋が置かれ、それをまたいで大小便に利用するのだが、ときには若い娘と見合うこともあるが、隠すこともなくお互いに用を足していた。長い避難民生活で、羞恥心が薄らいでいたのである。

三週間が過ぎてようやく検査が済み、上陸が許

された。収容されたのは、現在ハウステンボスに  
なっている海兵団の兵舎で、そこは数千人の引揚  
者が、それぞれの故郷へ向かう列車を待っていた。  
ここで朝鮮銀行券と軍票を日本銀行券に交換し、  
さらに日本海軍が残した物資の中から、若干の乾  
パンと衣類が支給された。衣類の中には、飛行機  
の搭乗員用の飛行服もあった。

三日後の夕刻、近くの南風崎駅から引揚者専用  
の列車に乗り込んだ。二人掛けの座席に三人が割  
り当てられ、車内は喧噪と蒸し暑さで息苦しかつ  
たが、それでも人々は、文句を言うこともなく、  
まもなく到着するであろう故郷の思い出を語り合  
っていた。

広島駅に到着したのは翌朝の夜明けだったが、  
バラック建ての駅舎の後方に、焼け野原となった  
市街地が見えた。うわさに聞いていたとおりの、  
原子爆弾の威力だった。人々はその悲惨な有様を  
見て、発車するまで静かになった。

故郷である群馬県の富岡に着いたのは、七月一

日であった。富坪の収容所を出てから約一カ月余りで、ようやくたどり着くことができた。出征していた兄二人、富坪の収容所を叔母たちと脱出した兄と、涙ながらに再会の喜びを分かち合った。

引揚げ後の仮の住まいは、昔ながらの古ぼけた家屋であった。この家屋は、父の生まれ育った懐かしい住まいでもあるが、三十年以上も改装されず倉庫となっていた。食べるためには、祖父の遺産であったわずかな農地を耕し、現金収入では二人の兄が稼いだのを家計に入れて、家族五人の飢えをどうにかしのぐことができた。

残暑の厳しい八月のある日、昭和十九年の春に出征した、長兄の戦死の公報が届いた。母は、流れ落ちる涙をぬぐいもせずに「どうして今ごろなの？ 二年半も過ぎているのよ、せめて一年後なら……」とつぶやいていた。母の悲しさにまみれた胸中は、察するにあまりある。終戦前に公報があれば、盛大な葬式を営み、軍国の母として大いに面目を保つことができたであろうにと思うと、

悲しみがこみあげてきた。

晩秋の刈り入れが終わったころ、父の葬儀を行った。野辺の送りという言葉が相応しい、惨めな葬儀であった。お布施も経費も親戚の香典で、なんとか都合した。母は父を看とった私だけにささやいた。「お父さんは死んで良かったのよ。今までは故郷へ錦を飾って帰っていたのに、今さらボロを着ては帰れないものね」と言ったが、無理な作り笑いが痛々しかった。

大晦日が近い木枯らしの吹く寒い日に、戦死した兄の葬儀が行われた。参列者も少なく、わびしい葬儀だった。この日から母の口数は次第に少なくなり、やがて病の床に伏すようになった。収容所の生活で、無理がたたったのが原因であろうが、そればかりではなく、現在の境遇では満足な治療を受けることも、十分な栄養をとることもできない。凍てつくような二月の寒い日に、母は死んだ。

三カ月の間に三度も行った葬儀に、参列者は同

情するよりも呆れていた。残された男兄弟四人では、意思の疎通も会話もまばらになってきた。女つ気のない家での炊事当番は、末弟の私が受け持った。生活難のために副食に手をかけることもなく、炊事は簡単だった。一年後、兄が結婚するまで学業と共に続けた。

高校も、夏休みには土方家業で授業料を稼ぎながら、なんとか卒業することができた。大学進学はかない夢であり、まずは就職することが第一である。コネの必要がない、公務員採用試験を七つも受けた。学科試験はすべて合格したが、採用通知はこない。人員整理の嵐が、いまだに止まない昭和二十六年の春だった。

最初に採用通知が届いたのが、七月の末である。本当に嬉しかった。これで私の戦後は、ようやく終わりになろうとしている。引揚げから就職するまでの五年間は、本当につらかった。避難民のときは、同じような境遇と目的があったが、引揚げのあとは周囲の人たちと大きな格差を見せつけら

れた。経済的な余裕と、戦争の影響を受けない人たちである。私の住むこの田舎では、戦役者も戦災者も数が少なく、生活難がさらに格差を広げ、惨めな思いを抱かせた。

就職によって、わずかながらも心理的な余裕が生じ、人並みの青春時代を過ごすことができた。

終戦から六十年、小学校及び中学校の同窓生との消息が判明し、毎年一回全国の各地で同窓会が開催され、出席することが生きがいの一つとなっている。